

令和 7 年度
「運営に関する計画」
最終評価

大阪市立味原小学校
令和 8 年 2 月

大阪府立味原小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価(総括シート)

1 学校運営の中期目標

<p>現状と課題</p> <p>令和6年度の全市共通目標・学校園の年度目標ともに、ほとんどの項目で目標の数値を上回ることができた。特に、【安全・安心な教育の推進】での「いじめは、どんな理由があってもいけないことと思いますか」の項目では目標を3.6ポイント、【未来を切り拓く学力・体力の向上】での「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の項目では目標を6.2ポイント上回ることができた。また、【学びを支える教育環境の充実】での第2期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準1(時間外勤務時間が45時間を超える月数0、かつ、1年間の時間外勤務時間が360時間以下)を満たす教職員の割合」の項目では目標を37.5ポイント上回ることができた。</p> <p>一方、【学びを支える教育環境の充実】での「授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。(ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日数を除く)」の項目では目標を8.0ポイント下回った。「まなびのポータル」を積極的に活用することが今後の課題である。</p>
<p>中期目標</p>
<p>【安全・安心な教育の推進】</p> <p>○ 令和7年度の全国学力・学習状況調査の「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的に回答する児童(生徒)の割合を、85%以上にする。</p> <p>○ 令和7年度の大阪府小学校学力経年調査・校内調査の「学校のきまり(規則)を守っていますか」に対して、肯定的に回答する児童(生徒)の割合を、92%以上にする。</p> <p>○ 令和7年度の全国学力・学習状況調査の「自分にはよいところがあると思いますか」の項目について、肯定的に答える児童の割合を、77%以上にする。</p>
<p>【未来を切り拓く学力・体力の向上】</p> <p>○ 令和7年度の全国学力・学習状況調査における、国語・算数の平均正答率の対全国比を上回るようにする。</p> <p>○ 令和7年度の全国学力・学習状況調査の「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」の項目について、最も肯定的に答える児童の割合を、35%以上にする。</p> <p>○ 令和7年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査における体力合計点の対全国比を上回るようにする。</p>
<p>【学びを支える教育環境の充実】</p> <p>○ 令和7年度の授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の75%以上にする。(ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日数を除く)</p> <p>○ 第2期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準1(基準2)を満たす教職員の割合を、令和7年度末に(基準156.4%・基準284.9%)にする。</p>

2 中期目標の達成に向けた年度目標（上段）と現時点での結果の総括（下段）

【安全・安心な教育の推進】	
①	<p>大阪市小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を 90%（大阪市 R7 目標 90%、本校昨年度 83.6%）以上にする。</p> <p>結果は 92.4% だったことから、達成できた。昨年度 83.6% より向上した。年間を通して、教職員全員で「いじめは、どんな理由があってもいけないことである」ことを指導してきた。また、生活指導委員会を月 1 回以上実施、校務支援 SKIP の「いいところみつけ」機能を活用し、全児童の実態をいつでも教職員全員が把握できるようにした。学習者用端末の「スクールライフノート」を活用し、いじめアンケートを学期に 1 回以上実施し、いじめの調査を関係諸機関と連携しながら進めてきた。改善してきてはいるものの、今後も学年の実態に応じた道徳教育や人権教育を行い、指導し続ける必要がある。</p>
②	<p>大阪市小学校学力経年調査における「学校のきまりを守っていますか」の項目に対して、肯定的に回答する児童の割合を 92%（昨年度 91.1%）以上にする。</p> <p>結果は 96.0% だったことから、達成できた。「学校安心ルール」を各教室に掲示し、内容の理解について発達段階に応じて指導できるようにした。集団生活に必要な学校でのやくそく（運動場の使い方・校時表・言葉遣いの話型・持ち物）を視覚的に示し、児童自ら実施できるようにした。トラブルやいじめにつながると予想される事案が発生したときは、緊急で集会を行い、啓発するアナウンスを行った。（今年度は 10 月 1 日にオンラインにて緊急集会を実施）道徳の授業で「規則の尊重」の公開授業（5 月 26 日）を行い、きまりを守る大切さについて教職員全体でも再確認することができた。</p>
【未来を切り拓く学力・体力の向上】	
③	<p>大阪市小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を 35%（大阪市 R7 目標 35%、本校 R6 学調 36.2%）以上にする。</p> <p>結果は 55.8%（3 年 72%、4 年 61%、5 年 45%、6 年 45%）だったことから、大幅に上回って達成できた。なお、校内児童アンケート調査（1 月）結果は、1 年 96%、2 年 80%、3 年 58%、4 年 78%、5 年 57%、6 年 57% だったことから、全学年で大幅に達成しているが、学年によってばらつきが見られる。本年度から校内研究の主題を「地域や社会・自然事象に対して自ら探究する児童の育成～生活科「体験」「表現」の過程、総合的な学習の時間「整理・分析」「まとめ・表現」の過程に着目して～」とし、具体的な児童の姿として「協働的な活動により、思考を深めることができる児童」として全学年で取り組んだ。具体的には、友達の思いや考えと比べたり関連付けたりするために、自分の思いや考えを「書く」活動を取り入れた。考えを広げ、深めるために観点を明確に示し、「話す」「聞く」ことを意識させて交流活動を展開した。これらの取組が目標達成につながったと考えられる。</p>
④	<p>大阪市小学校学力経年調査における「朝食を毎日食べていますか」に対して、肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を 100%（本校昨年度 98.8%）とする。</p> <p>結果は 98.0%（3 年 100%、4 年 100%、5 年 94%、6 年 98%）だったことから、達</p>

	<p>成できなかった。なお、校内児童アンケート調査(1月)結果は、1年98%、2年95%、3年100%、4年95%、5年96%、6年97%だった。1学期の結果を集計し、朝食を毎日食べることが難しい児童を毎月の生活指導委員会で把握した。各家庭の事情や生活環境の違いなどが要因として考えられるため、保護者への啓発として、給食だより5月号や、食育だより2月号などを活用したり、個別に声かけをしたりした。児童への啓発として、給食時間の給食献立紹介(パワーポイントでのスライドショー)の内容に追加したり、天王寺区主催「朝食レシピコンテスト」の全児童の参加を促した。「朝食レシピコンテスト」では本校児童が、最優秀賞、優秀賞を受賞した。</p>
<p>【学びを支える教育環境の充実】</p>	
<p>⑤</p>	<p>授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の75%(大阪市R7目標75%、本校昨年度42.0%)以上にする。(ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日数を除く)</p> <p>5月86.6%(78.4)、6月86.2%(74.6)、7月88.5%(76.7)、8月88.1%(69.8)、9月85.1%(78.3)、10月80.0%(75.8)、11月89.9%(74.6)、12月92.2%(78.5)だった。(目標:75%以上)であり、目標を達成できている。</p>
<p>⑥</p>	<p>第2期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準1(時間外勤務時間が45時間を超える月数0、かつ、1年間の時間外勤務時間が360時間以下)を満たす教職員の割合を56.4%(大阪市R7目標56.4%、R6本校87.5%)以上にする。</p> <p>基準1(※時間外勤務時間が45時間を超える月数0、時間外勤務時間が現在180時間以下)を満たす教職員の割合は4月78.26%(23人中18人)、5月78.26%、6月79.17%(23人中19人)、7月79.17%、8月79.17%、9月75%(23人中17人)、10月66.67%(23人中15人)、11月66.67%、12月66.67%であり、目標を達成できている。</p>

大阪市立味原小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価 (目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した	B: 目標どおりに達成した
C: 取り組んだが目標を達成できなかった	D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p>【安全・安心な教育の推進】</p> <p>① 大阪市小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を90%(大阪市 R7 目標 90%、本校昨年度 83.6%)以上にする。</p> <p>② 大阪市小学校学力経年調査における「学校のきまりを守っていますか」の項目に対して、肯定的に回答する児童の割合を92%(昨年度 91.1%)以上にする。</p>	B
<p>年度目標の達成に向けた取組内容(上段) 目標の達成状況を測る指標(中段) 現時点での結果と分析(下段)</p>	達成状況
<p>取組内容①【いじめ・不登校・問題行動・児童虐待等への対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生活指導校内委員会(いじめ防止対策委員会、不登校・虐待対策委員会)を月1回以上実施する。配慮を要する児童に関わる情報、意見交換、指導についての検討、共通理解、またいじめアンケートを基に情報の共有を行う。 校務支援 SKIP の「いいところみつけ」機能を活用し、全児童の実態をいつでも教職員全員が把握できるようにする。 いじめ・不登校・問題行動・児童虐待(ヤングケアラー)の調査を関係諸機関と連携しながら進める。 学習者用端末の「スクールライフノート」を活用し、いじめアンケートを学期に1回以上実施する。 集団生活に必要な学校でのやくそく(運動場の使い方・校時表・言葉遣いの話型・持ち物)を視覚的に示し、また月に1度の児童朝会にて全体に指導し、児童自ら実施できるようにする。 「学校安心ルール」を各教室に掲示し、内容の理解について発達段階に応じて指導できるようにする。 	B
<p>指標</p> <p>① 年度末の校内調査において、「いじめの可能性に気づいた時点で、直ちに管理職(校長・教頭等)に報告している」とする教員の割合を100%とする。</p> <p>② 年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率(昨年度 2.3%)を前年度より減少させる。</p> <p>③ 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合(28.6%:7名中2名)を増加させる。</p> <p>④ 年度末の校内調査において、暴力行為発見件数を6件以下(昨年度 6件)にする。</p>	
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標①の結果は100%と達成することができた。 指標②に関して、不登校児童(1月時点で15日以上欠席)の在籍比率が減少(今 	

<p>年度 1.5%、昨年度 2.3%) し、達成することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指標③に関して、前年度不登校児童の改善の割合は 5 人中 2 人となり、40%と改善の割合が増加したことから、達成できた。 ・指標④は 16 件だったことから、達成できなかった。 <ul style="list-style-type: none"> ・毎月の生活指導委員会実施（5 月 14 日、6 月 17 日、7 月 4 日、9 月 4 日、10 月 20 日、11 月 20 日、12 月 2 日、1 月 13 日）や、「いいところみつけ」機能の活用（1 月末現在 272 件の入力）、スクールライフノートを活用したいじめアンケートの実施（6 月、11 月、2 月）、学校安心ルールの掲示（4 月～）および確認をすることで児童の実態をすぐに把握・共有し、全教職員で見守る体制を作っている ・また、生活指導面で課題のある児童に対し、校内会議（週 2～3 回）やケース会議（7 月 30 日、8 月 5 日、9 月 18 日、10 月 3 日、12 月 25 日）を開き、児童への指導について話し合う機会を設けた。 ・トラブルやいじめにつながると予想される事案が発生したときは、緊急で集会を行い、啓発するアナウンスを行った。（今年度は 10 月 1 日にオンラインにて緊急集会を実施） ・不登校が長期化しないためには、対処療法的な対応や指導ではなく、チームの対応力が必要である。学級・学年・特別支援担当・養護教諭・管理職・SC・SSW などの関係諸機関と連携し、日々のアプローチを継続している。また、校内会議（週 2～3 回）、スクリーニング会議Ⅱ（5 月 20 日、7 月 18 日、12 月 15 日）を開いたり、教育相談（こども相談センターなどを含む）も計 15 回行ったりし、不登校傾向にある児童や保護者と学校との関係が途絶えないように連絡を取ることができた。 	
<p>取組内容②【防災・減災教育の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭連絡票に、緊急時に伴う引き渡しの際に引き取りに来る保護者を記入する欄を設けて、年度当初から把握できるようにする。 ・ 全児童の住所を確認し、地区別集団下校がしやすい班編成を行い、緊急時に伴う集団下校訓練の企画・運営をする。 ・ 火災・地震・津波・不審者による避難訓練を年間 3 回実施する。 ・ 1934 年 9 月 21 日に関西地方を襲った室戸台風で、味原小学校の児童 16 名、教職員 2 名が亡くなった。被災者を悼む心と次代への教訓として、災害の記憶を忘れないように心がけるようにする。 	
<p>指標</p> <p>⑤ 校内児童アンケート調査(1 月調査)で「学校にいる間に、火事や地震などが起こった場合、先生の指示を聞き、落ち着いて避難することができますか」の項目について、肯定的に回答する児童の割合を 100%（昨年度 97.3%）とする。</p>	B
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 指標⑤の結果は 98.3%だったため、達成できなかった(1 年生 100%, 2 年生 100%, 3 年生 100%, 4 年生 96%, 5 年生 94%, 6 年生 96%)。前年度の 97.3%から 1 ポイント上げることができた。 ・ 避難訓練を年間 3 回実施することができた(4 月 15 日火災、9 月 4 日地震及び津波、1 月 23 日不審者)。全て事故や怪我なく安全に実施することができた。訓練後には Teams を用いてふり返りを行ったり、身近に起こった地震や災害を動画視聴したりして、防災についての意識を持つことができた。 ・ 室戸台風での被害及び台風災害への備えについて、児童朝会でパワーポイントを用いて指導を行った(9 月 4 日)。 	

<ul style="list-style-type: none"> ・前年度の反省（たてわり班と混同してしまい避難に時間がかかる）を生かし、班編成を再編し、地区別集団下校をスムーズにできるようにした。地区別集団下校を2回実施した（5月14日、1月23日）。 	
<p>取組内容③【安全教育の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級活動の時間を中心に、他教科等の時間と関連させながら情報モラル教育を行う。外部講師を招聘し、出前授業を行う。 	
<p>指標</p> <p>⑥ 校内児童アンケート調査(1月調査、5・6年生と5・6年生保護者対象)で「スマホの危険性や適切な使い方について理解していますか」の項目について、肯定的に回答する児童の割合を100%、保護者の割合を93%以上にする。</p>	
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指標⑥に関する結果は、児童の割合100%だったため達成できた。 ・12月15日に、NTTdocomoから外部講師を招聘し、高学年を対象にSNSの利用方法やそれに伴うリスク、SNS上のコミュニケーションの取り方等についての指導をいただいた。保護者の参観も可とし、5・6年生合わせて10名ほどの保護者に参加いただいた。児童らも興味を持って学習できており、アンケートの結果にも繋がったと考えられる。スマートフォンの所持は年々低年齢化しており、SNSを利用する低学年もいると考えられる。発達段階に合わせ、全学年での情報モラル教育を検討するとともに、今後も外部講師の招聘・出前授業を引き続き取り組んでいく。 	B
<p>取組内容④【道徳教育の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道徳教育の推進を図る研修を行う。 ・3つの重点内容項目（親切・思いやり、規則の尊重、個性の伸長）に関する公開授業を行う。 	
<p>指標</p> <p>⑦ 道徳教育に関する研修を受講して「自校の取組に活用できた」と回答する教員の割合を100%（昨年度94%）とする。</p>	
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指標⑦は94%だったことから、達成できなかった。しかし、5月26日に内容項目「規則の尊重」、12月12日に内容項目「個性の伸長」の公開授業を行い、教員の道徳授業力の向上を図った。3月3日には「親切・思いやり」の公開授業を予定している。しかし、公開授業後に討議会は実施しておらず、取り組みに活用できるまでは達することができていなかった。 ・本校での取り組み「道徳科授業において、問い返し発問を効果的に使い、児童の道徳的諸価値の理解を図る」を大阪市内の4つの小学校にて、校内研修の講師として報告をした。7月18日に本田小学校、7月22日に西三国小学校、7月23日に今津小学校、11月19日に長居小学校に訪問し、すべての学校にて感想・助言をいただき、本校にとって有益な示唆を受けた。 	B
<p>取組内容⑤【キャリア教育の充実】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体系的な「キャリア学習」に取り組むための年間指導計画を作成し、実施する。 ・生活科、総合的な学習の時間を中心に、外部の方（地域の人や外部講師等）と接する機会を各学年、年間で1回以上設ける。 	

<p>指標</p> <p>⑧ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「将来の夢や目標をもっていますか」の項目について、肯定的に回答する児童の割合が81%(大阪市R6目標80.5%、本校R6学調86.5%)以上にする。</p>	B
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標⑧に関する1月の結果は、全体で91%(1年97.8%、2年100%、3年96.2%、4年89.8%、5年77.4%、6年87.7%)となり達成した。 各学年でキャリア教育の年間指導計画を作成し、それに基づいて毎月教科と関連させながら実施したが、生活・総合の学習との関連も深いため学期ごとに進捗状況や年間指導計画の見直しをする必要がある。 年度初めや学期末、遠足や運動会などの学校行事において、キャリアパスポートを活用して目標の確認や振り返り活動をしたが、学年内での取り組みで終わってしまっている。今後は学校全体の取り組みへとつなげるために、キャリアパスポートの様式について統一したものにするなど検討が必要である。 生活科・総合的な学習の時間を中心とした、カマキリ博士の出前授業、天王寺区社会福祉協議会・地域ボランティアの出前授業、玉造日出商店街での見学・お店番体験、味原クラブとのボッチャ大会、高齢者施設の職員・利用者さんとの交流、運動場の芝生化や管理に関わっている方にお話を聞く会などの活動を通して、学校外の様々な人の思いや生き方に触れることができた。 5年総合では、OEN(Osaka city Education Network)を活用した様々な企業からのキャリア教育出前授業で「働くとは?」をテーマに、仕事をするうえで大切にしていることややりがいなどを聞かせていただき、業種が違っていても仕事に対する共通した思いを知ることができた。しかし、「働く」というテーマは児童にとって身近に感じるのが難しく、今後は、「職業観」だけでなく、「誰かの役に立つ」という視点や、児童にとってより身近な人と関わる機会も取り入れ、より切実な課題として取り組めるキャリア教育へと転換していく必要がある。 	
<p>取組内容⑥【人権を尊重する教育の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> 『学校園における校内人権教育・啓発推進計画』実施計画を作成し、実施する。 	
<p>指標</p> <p>⑨ 年度末の校内調査において、『学校園における人権教育・啓発推進計画』実施計画の達成評価において、「達成できた」と回答する教員の割合を100%(昨年度97%)とする。</p>	
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標⑨については、100%となり、達成できた。 人権教育年間計画を作成し、各学年の状況に応じて計画をもとに実施を進めることができた。外国人教育の視点については、天王寺区国際理解教育部公開授業を11月12日に実施した。年度末の校内調査において、『学校園における人権教育・啓発推進計画』実施計画の達成評価において、「達成できた」と回答する教員の割合が、100%であった。 今年度も全学年でLGBTQ+に関する教育の推進を計画し、9月26日に全学年の取組状況や計画的に発達段階に応じた内容で積み上げが継続されていることを確認した。6年生は、10月10日にゲストティーチャーによる出前授業、教職員研修(指導例の紹介等)を行った。その後、4年生は12月下旬、1年生は1月下旬、2年生は2月上旬・3・5年生は2月下旬に各学年で授業を行った。各学年の実践を積み重ね、年度末には各学年の系統表を作成するなど、年度を通して学年ごとの系統性を意識した計画になっていたかを確認することができた。 	B

取組内容⑦【インクルーシブ教育の推進】【多文化共生教育の推進】

- ・ 児童理解研修会を学期に1回以上実施する。配慮を要する児童に関わる情報、意見交換、指導についての検討、共通理解を行う。
- ・ たてわり班活動を月1回以上実施し、自分の長所や自分らしさに気づき、活動の中で発揮できるようにしたり、自分の思いや相手の気持ちを大切にする場を設定したりする。
- ・ 全校遠足、味原フェスティバル、たてわり班活動などでは「リーダーシップ」「フォロワーシップ」の役割を示し、学年や立場に応じて責任を果たそうとすることができるようにする。
- ・ 児童全員が場に応じたあいさつや言葉遣いが身につけられるように、児童会児童を中心に取組を考え、実践できるようにする。

指標

- ⑩ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「自分には、よいところがあると思いますか」の項目について、肯定的に回答する児童の割合が89%(大阪市R7目標77%、昨年度88.3)以上にする。
- ⑪ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の項目について、肯定的に回答する児童の割合が100%(大阪市R7目標96%、本校R6学調97.5%)とする。

結果と分析

- ・ 指標⑩に関する1月の結果は全体で91%(1年100%、2年100%、3年91%、4年92%、5年79%、6年90%)となり達成した。指標⑪に関する1月の結果は全体で98.3%(1年100%、2年100%、3年100%、4年100%、5年98%、6年94%)となり、指標を達成することができなかったが、6月の調査結果よりも伸びている学年が多かった。具体的な取り組み内容から成果が見られた。
- ・ 児童理解研修会の実施(5月12日・10月29日・2月16日)することができた。特別支援学級に在籍している児童、通級指導教室に通っている児童だけでなく、校内の配慮を要する児童について全教職員で考える場を設けることができた。児童集会(第1木曜日以外の木曜日)やスマイルタイム(2月9日現在16回)については当初の計画通りに進められており、さらに児童同士の縦のつながりを深められるような活動を児童集会は、集会委員会、スマイルタイムは、6年生のリーダーを中心に適宜話し合いを進め実行できた。6年生のリーダーだけではなく、下級生も遊びの提案をして全員で作りに上げるたてわり活動にしていく必要がある。
- ・ スマイルタイムの活動の最後には振り返る時間(13:40~13:45)を設け、自身が気づいていない素敵なところに気付いたり、自分のよいところや人の役に立つことのよさに気づいたりできるような時間にしていくよう、継続的に声をかけることができた。
- ・ 令和7年度版の「100のなかよし言葉カレンダー」を作成し、今日の言葉を各学級で繰り返し発し、学校全体として仲良し言葉がたくさん使われること意識させるような声かけの時間(前日の帰りの時間や当日の朝の時間)に実践することができた。
- ・ 月に5回以上、異学年交流の場を設けている(児童集会・スマイルタイム)。ただ集まるだけの活動にならないように毎回めあてを設定し、リーダーシップ、フォロワーシップをとれるように計画を立てた。
 - ・ 児童会を中心に、毎朝のあいさつ運動を実施したものの、場に応じたあいさつ

B

や言葉遣いが身につけているとは言えなかった。立つ場所や時間を変えるなど、実施内容を改善することができた。11月には今年度2回目の「あいさつ週間」としての全児童対象のあいさつ運動を実施し、10月末の代表委員会で、実施の方法については話し合いを行った。その後も、外国語でのあいさつを検討したり、相手の名前を呼んであいさつをしたりと、学校全体で双方向にあいさつができるように取り組みを続けた。

大阪市立味原小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した	B: 目標どおりに達成した
C: 取り組んだが目標を達成できなかった	D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p>【未来を切り拓く学力・体力の向上】</p> <p>③ 大阪市小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を 35%(大阪市 R7 目標 35%、本校 R6 学調 36.2%)以上にする。</p> <p>④ 大阪市小学校学力経年調査における「朝食を毎日食べていますか」に対して、肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を 100%(本校昨年度 98.8%)とする。</p>	B
<p>年度目標の達成に向けた取組内容(上段)</p> <p>目標の達成状況を測る指標(中段)</p> <p>現時点での結果と分析(下段)</p>	達成状況
<p>取組内容⑧【就学教育前カリキュラム等に基づいた教育の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> 味原小学校教職員が味原幼稚園の公開保育、公開授業後の検討会、作品展に参加したり、味原幼稚園の教職員を味原小学校の公開授業や討議会に招待したりして、意見交流を行う。学期に1回以上、幼小連携部会(小学校・幼稚園職員で編成)を行い、「味原アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム」の検討を行う。 	A
<p>指標</p> <p>⑫ 年度末の校内調査において、「幼小連携に対する意識が高まってきましたか」に対して、肯定的な「高まってきた」と回答する教員の割合を 100%(昨年度 100%)とする。</p>	
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標⑫は100%だったことから、目標(100%)を達成することができた。以下のように、園児・児童の合同活動の機会や幼稚園職員と交流する場を多数設けることで、本校教職員全員の幼小連携や接続に関する意識を高めることにつながったと考えられる。 味原小学校、味原幼稚園、味原保育所と連携し、保幼小接続の取組を計画通り、実施した(別紙資料1参照)。 昨年度に検討し作成した味原アプローチカリキュラム「ハチララタイム」を第1学年で1学期に実施した。「幼小接続期におけるカリキュラム作成とその実際」について、5月11日に日本保育学会第78回全国大会(長野県立大学)で発表した(別紙資料2参照)。また、味原小学校と味原幼稚園での実践を基に、「幼児～児童期における学びが自覚化する教師の働きかけ—ミラー型ライン図を用いた教師と子どもの対話分析をもとに—」をテーマに、5月12日に日本保育学会第78回全国大会(長野県立大学)で自主シンポジウムを行った(別紙資料3参照)。両発表とも、全国の先生方から指導・助言をいただき、本校にとって有益な示唆を受けた。 	

<ul style="list-style-type: none"> 12月21日に中谷財団 2025年度科学教育振興助成成果発表会（東京工科大学蒲田キャンパス）で、本校の取組「幼児期の学びの芽生えを自覚的な学びへ転換する環境づくり」を全国に報告し、優秀賞を受賞した（別紙資料4参照）。 令和8年度味原アプローチカリキュラム「ハチララタイム」を幼小接続部会で検討し（1月19日、2月19日）、実施に向けて準備を進めている（別紙資料5参照）。 	
<p>取組内容⑨【言語活動・理数教育の充実(思考力・判断力・表現力等の育成)】【主体的・対話的で深い学び】の推進(個別支援の充実)】【全市共通テスト等の実施と分析・活用】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全学級で、必要に応じた重点的な指導や指導方法等の工夫をして「指導の個別化」を行ったり、一人一人に応じた学習活動・学習課題の提供をする時間を確保して「学習の個性化」を行ったりする。 全学級で、多様な他者（同学級や同学年、異学年の児童、地域の人等）と協働する授業を行い、異なる考え方を組み合わせ、よりよい学びを生み出すことを目的とした「協働的な学び」を実現する。 年1回、同学級以外の他者（同学年、異学年の児童、地域の人等）と協働する授業を行い、異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びを生み出した事例を収集する。 	
<p>指標</p> <p>⑬ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか」の項目について、最も肯定的に答える児童の割合を40%以上とする。(本校R6学調：59.9%)</p> <p>⑭ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」の項目について、最も肯定的に答える児童の割合を60%以上とする。(本校R6学調73.6%)</p> <p>⑮ 小学校学力経年調査における、国語・算数・理科・社会・英語の平均正答率の対大阪市比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より0.01ポイント向上させる。</p>	B
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標⑬は、75.8%（1年91%、2年83%、3年73%、4年90%、5年59%、6年76%）だったことから、大幅に上回って達成できた。 指標⑭は、83.4%（1年100%、2年95%、3年89%、4年88%、5年62%、6年71%）だったことから、大幅に上回って達成できた。 指標⑮は、国語<3年+2.6（前年度データなし）、4年-4.8、5年-1.9、6年-0.3>、算数<3年+0.6（前年度データなし）、4年-2.7、5年-1.8、6年-4.7>、理科<3年+6.9（前年度データなし）、4年-4.3、5年+7.0、6年+8.2>、社会<3年+5.8（前年度データなし）、4年-3.3、5年+0.2、6年-3.3>、だったことから、達成できなかった。 個に応じた学習活動・学習課題を提供する時間の確保や、複数人指導や放課後に少人数指導を、各学年行っていることが指標⑬⑭の達成要因と考えられる。 指標⑮達成に向けて、現4～6年の全児童の昨年度の小学校学力経年調査における、国語・算数・理科・社会・英語の各教科の正答率に加え、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の各観点別正答率、「基礎」「活用」「記述」問題の各正答率の結果を分析した。教職員全員で、全児童の 	

<p>分析結果を共有した。児童一人一人の特性・学習進度・学習到達度などを分析した結果を活用して、学習内容の確実な定着に向けて必要に応じた重点的な指導、指導方法などを工夫して、指導の個別化を図った。一人一人に応じた学習活動・学習課題を提供し、児童自らが学習を調整していく学習の個性化を図った。具体的に、3～6年生対象に、11月10日、12日、19日、26日、12月1日の計5回、放課後時間を活用した個別支援の充実を図る取組を実施した。参加した児童の経年調査結果を分析したところ、前年度の平均正答率の対大阪市比よりも向上させた児童の割合は約60%だった。また、参加した児童の感想について、回数を重ねるごとに、「～ところが苦手だ、難しい」といった自分の課題を分析するコメントや、「～ところがわかった」といった自分ができるようになったことに関するコメントが増えてきた。まさに、自分を客観的に分析している姿（メタ認知）が見られた。この姿は学力と非常に親近性がある。また、経年調査への意気込みを書いている子どもが増えた。担当した子どもの「～がわかった」「～がわからなかった」といったコメントは、教師の指導改善に役立った。なお、5年生対象に2月25日、3月9日、11日、16日の計4回、同様の取組を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 理科学習において、全学級で、必要に応じた重点的な指導や指導方法等の工夫をして「指導の個別化」を行ったり、異なる考え方の組み合わせ、よりよい学びを生み出すことを目的とした「協働的な学び」を実現したりするために、「問題解決の力に焦点を当てた小学校理科における評価基準構築の試み～児童の記述分析を手がかりとして～」をテーマに研究を進めた。その成果と課題を8月24日に日本理科教育学会全国大会（富山大学）で発表した（別紙資料6参照）。また、令和7年度大阪市「がんばる先生支援」研究支援に、本校の取組「理科の学びをつなぐ『評価基準と指導の手立て』の開発～『思考・判断・表現』の観点から見る第3～6学年の実態分析と系統的・発展的な指導～」が選定され、研究発表会・公開授業を8月29日に行った。北海道から沖縄県まで全国から理科に精通された先生方約70名が参加した（別紙資料7参照）。両発表とも、全国の先生方から指導・助言をいただき、本校にとって有益な示唆を受けた。 本年度の研究教科である生活科・総合的な学習の時間を中心に、同学級以外の他者（同学年、異学年の児童、地域の人等）と協働する授業を行い、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出した事例を収集し、「研究紀要」としてまとめた。 	
<p>取組内容⑩【英語教育の強化】</p> <ul style="list-style-type: none"> 小学校6年間を通して、英語モジュールや外国語活動、外国語の内容を系統立てた指導計画を作成し、児童の発達段階に応じた指導を行う。 週3回は味原タイムで英語モジュールを全学級で行う。年間8回、英語集会を行う。 	
<p>指標</p> <p>⑩ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「外国語(英語)の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を87%(昨年度86.9%)以上にする。</p> <p>⑪ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「外国語(英語)の授業で学習したことを使っているいろいろな人と話をしたいと思いますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を84%(R6経年本校83.5%)以上にする。</p>	B
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標⑩は、89%(1年89%、2年93%、3年94%、4年100%、5年77%、6年80%)だったことから、達成できた。 指標⑪は、87%(1年96%、2年95%、3年87%、4年92%、5年76%、6年80%)だったことから、達成できた。 	

<ul style="list-style-type: none"> ・ 指標⑩⑪に否定的に回答する児童が多かった高学年対象に、回答の理由などを調査した。結果、「難しくてわからない」「覚えることが多い」が多かった。また、特に苦手と感じることは「話すこと」「書くこと」と回答する児童が多く、「ゲームをするとき」に楽しいと感じる児童が最も多かった。 ・ 児童主体の活動を多く取り入れた授業改善を行った。具体的に、ペアワーク・グループワーク（授業で学んだことを児童同士で話し合う機会を増やす）、質疑応答練習（児童が相手に質問したり、相手の質問に答えたりする練習を多く取り入れる）、ロールプレイング（日常生活で使われるような様々な場面を設定し、児童がその役割になりきって英語で会話する）、発表・ディベート（自分の思いや考えを英語で発表したり、テーマについてディベートをしたりする機会を設ける）などを行った。また、児童全員が目標をもち、英語を使っていろいろな人と話す機会として、高学年中心に他校との英語交流を行った。 ・ 会話の際、「間違えても大丈夫」な安心感をつくるようにした。正確な文法より「伝わった!」という成功体験を重視したり、間違いをすぐ直さず、まずは「good try!」と承認したりするようにした。 	
<p>取組内容⑪【体力・運動能力向上のための取組の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 体育科における「体づくり運動」「器械運動」「陸上運動」「水泳」「ボール運動」「表現運動」のいずれの領域に苦手意識を持っているのか実態を把握し、授業改善を行う。 ・ 4月の体力テストの記録を基に、10月の記録の目標を児童自らが設定するようにする。練習メニューを考えたり、計画的に取り組んだりして、体力・運動能力向上に向けて自己調整しながら取り組むことができるようにする。 ・ 体力・運動能力向上に向けて、体育科の授業や休み時間に、なわとびやかけ足、ボール投げ等の運動に取り組みやすいように、校内運動環境を整備する。 	
<p>指標</p> <p>⑩ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合を72%(大阪市R7目標62.6%、昨年度71.5%)以上にする。</p> <p>⑪ 体力テストの全種目において、4月に比べて10月の記録の方が良い児童の割合を56%(昨年度56.0%)以上にする。</p>	C
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 指標⑩は、77%(1年91%、2年90%、3年73%、4年86%、5年57%、6年70%)だったことから、達成できた。 ・ 指標⑩に否定的に回答する児童を対象に、回答の理由と苦手意識をもつ体育領域(低学年:体づくりの運動遊び、器械・器具を使っての運動遊び、走・跳の運動遊び、水遊び、ゲーム、表現リズム遊び 中学年:体づくり運動、走・跳の運動、陸上運動、水泳運動、ボール運動、表現運動、保健 陸上運動、水泳運動、ゲーム、表現運動、保健 高学年:体づくり運動、器械運動、陸上運動、水泳運動、ボール運動、表現運動、保健)を調査した。理由として「面白くないから」「疲れるから」「苦手なものがあるから」などの回答が見られた。苦手意識をもつ領域は、低学年は「特になし」、中学年は「陸上運動」、高学年は「器械運動」が最も多かった。 ・ 11月に「運動好きになるぞ月間」を設定し、低中高学年別クラス対抗で玉入れを行った。事前事後のアンケート結果で、肯定的に回答した児童が増えたことから、効果はあったといえる。しかし、最も肯定的な「好き」を回答するまでには達していない。特に実施前に「どちらかといえばいいえ」と回答した児童が「好き」と回答するまでには至らなかった。この結果を踏まえて、本取組を改善、も 	

<p>しくは別の取組を検討する必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動に関して、苦手意識がある児童は高学年に多い傾向である。毎日 5 分間運動を実施したり、勝ち負けにこだわらず、前の自分より達成できた喜びを実感できる学習環境や授業づくり、学習カードの精選・活用を行ったりした。 指標⑩の結果は2%だったことから達成できなかった。 4月の体力テストの個人結果を返却し、秋の体力テストに向けての目標と達成に向けての計画を立てるようにした (別紙資料 8 参照)。 4月の体力テスト全種目の結果について、各学年の男女で、全国平均点数より2ポイント以下の人数と2ポイント以上の人数を数えた (別紙資料 9 参照)。その結果から、50m 走と立ち幅跳びに特に課題があることがわかった。10月に「体力アップ月間」を設定し、体力サーキット(2分×4種目：立ち幅跳び、反復横跳び、ラダー、5m スタートダッシュ)約10分間を20分休みに講堂で行った。 講堂ギャラリー鉄柵に的としてのフラフープを設置したり、立ち幅跳びの記録がわかりやすいように10m ずつテープを貼ったマットを用意したりするなど、環境の整備を行った。 体力テストの全種目別に、4月に比べて10月の記録の方が良い児童の割合をまとめた (別紙資料 10 参照)。その結果から、特に、20m シャトルランの割合が低いことがわかった。 冬季体力づくり運動として、1月から2月にかけて3週間、20分休みに運動場で「かけ足」を学年ごとに行った。タブレット端末を活用して、走った周の数を入力するようにした。毎日の上位ランキングが表示されるようにして、意欲向上を図った。 参考資料として、4月の体力テストの結果を真田山小学校と比較した (別紙資料 11 参照)。 	
<p>取組内容⑫【健康教育・食育の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学期に1回健康週間を設定し、全学年で出前授業を実施する。 年に2回程度「食に関する指導」を実施する。 全学級で、毎日の給食時間に給食献立を紹介する。 	
<p>指標</p> <p>⑩ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」に対して肯定的に回答する割合を77%(大阪市 R5 年度実績 89.3%、本校 R5 年度 83.0%)以上にする。</p> <p>⑪ 年度末の校内調査において、「食に関する指導について適切な評価指標を設定し評価をしているか」に対して、肯定的に回答する教員の割合を100%(昨年度100%)とする。</p>	B
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標⑩は89.6%(1年96%、2年98%、3年87%、4年94%、5年91%、6年76%)だったため、目標を達成することができた。 2学期健康週間は、1学期の結果を集計し、その内容(実態)を児童や保護者に周知するために、学年だよりを活用した。各学年の具体的な数字を公開することで、家庭への啓発、意識的に取り組む姿勢に繋げるようにした。規則正しい生活を送ることが難しい児童を毎月の生活指導委員会で把握した。 10月に1・2年生対象で「おきるじこくとねるじこく」という授業を実践した。「起きる時刻を決めて、そこから逆算して寝る時刻を決める」という計算方法を大きな時計を使って学習した。眠育絵本「ねこすけくん なんじにねたん？」を 	

活用し、低学年児童にわかりやすく睡眠の大切さを伝えた。後日、ヤクルト出前授業でも同様の学習をし、定着を図った。

- 10月の健康週間で、保健委員会で「すいみんクイズ」を作成し、全校児童で取り組んだ。全問正解・一問間違いの児童には、集会で表彰状を渡した。
- 保護者を対象とした啓発活動として、2学期に「規則正しい生活（インターネット、テレビ（ネット配信）、ゲームなどの時間を見直すことも含む）」についての学習参観を全学級で行った。第1～4学年の保護者の参加数が多かった。「睡眠」の大切について、保護者への啓発につながったと考えられる。授業参観のニーズも高いことも考えられる。しかし、参加してほしい保護者がほとんど参加していなかった。別の手立てを考える必要がある。また、3学期に実施する、学校医や外部講師を招く学校保健委員会「快眠セミナー」を全学年の保護者対象（昨年度は6年生の保護者のみ）として、参加を募っている。
- 指標⑭は100%だった。計画的に「食に関する指導」を進めていること（別紙資料 12 参照）と、全学級で毎日の給食時間に給食献立を紹介していること（下図）が影響していると考えられる。



毎日の給食時間に給食献立（パワーポイントでのスライドショー）を全学級で紹介している様子

大阪市立味原小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した	B: 目標どおりに達成した
C: 取り組んだが目標を達成できなかった	D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標の達成に向けた取組内容、目標の達成状況を測る指標、結果と分析	達成状況
<p>【学びを支える教育環境の充実】</p> <p>⑤ 授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の75%(大阪市R7目標75%、本校昨年度42.0%)以上にする。(ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日数を除く)</p> <p>⑥ 第2期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準1(時間外勤務時間が45時間を超える月数0、かつ、1年間の時間外勤務時間が360時間以下)を満たす教職員の割合を56.4%(大阪市R7目標56.4%、R6本校87.5%)以上にする。</p>	B
<p>年度目標の達成に向けた取組内容(上段)</p> <p>目標の達成状況を測る指標(中段)</p> <p>現時点での結果と分析(下段)</p>	達成状況
<p>取組内容⑬【ICTを活用した教育の推進】【データ等の根拠に基づく施策の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> 毎日の「心の天気」入力(登校時・下校前)や「学びの天気」入力(授業後)、毎日の連絡帳の配信、学期に1回以上の「いじめアンケート」の実施を学習者用端末で行う。 1学期中に、全学年でオンライン学習を行う。学習欠席児童へのオンライン学習など、全児童の学習保障を行う。 SKYMENUやデジタルドリル(navimaを含む)を活用し、学習履歴や学習行動記録等のデータを集積し、各児童、各学級、各学年のデータ変化を分析し、指導に生かす。 	B
<p>指標</p> <p>⑳ 校内児童アンケート調査(1月調査)の「PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」の項目について、ほぼ毎日と答える児童の割合を75%以上とする。(R6学調:75.0%)</p>	
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標⑳に関する1月の結果は全体で89.6%(1年98%、2年93%、3年81%、4年98%、5年94%、6年76%)となり達成した。 「心の天気」利用率は1~4年生は85~95%であるのに対して、高学年は70%台となっている。 「心の天気」利用率は、さらに定着を図るために、また利用をさらに徹底できるようにするために、毎週skipで利用率を確認し、それを全教職員に共有した。6月に比べて利用率は平均10ポイント程度上がった。また、発達段階や学年、クラスの状態に応じて個別に声をかけたり、一斉に入力する時間を設けたりタブレットをすぐに手が届く場所に保管をしたりして教職員や児童が学習者用端 	

<p>末を使う意識を高められるようにした。新しい学習者用端末に変わり、入力なども短時間でできるようになったことも利用率があがった一因と考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学期に1回、「いじめアンケート」を学習用端末で行った。 ・ 1学期は2～6年生で、2学期以降は全学年で「学校アンケート」学習者用端末で行った。 ・ 1学期の早い時期（5月2日）に、全学年で放課後オンライン授業を行い、動作確認も行った。 ・ 学習欠席児童へのオンライン学習を積極的に行った。全学年で周知を徹底するようにしたことで、どの学年もオンライン学習を行うことができた。 ・ SKYMENU やデジタルドリルを授業や長期休業中などで活用した。学習履歴や学習行動の記録などのデータを集積し、個に応じた支援を考え、実施した。長期休みに活用が滞っているときは、保護者に通知をした。 ・ 授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日（ただし、事務局が定める学校行事等 ICT 活用が適さない日数を除く）の5月 86.6% (78.4)、6月 86.2% (74.6)、7月 88.5% (76.7)、8月 88.1% (69.8)、9月 85.1% (78.3)、10月 80.0% (75.8)、11月 89.9% (74.6)、12月 92.2% (78.5) だった。（目標:75%以上）だった。使用率向上に向けて、連絡帳の内容を「まなびのポータル」の「お知らせ管理機能」を活用して配信したり、teams を活用して授業をしたり、「SKYMENU」や「デジタルドリル」の宿題配信を積極的に活用したりした。また、学習者用端末をいつもそばに置いて、すぐに「まなびの天気」などを入力できる環境を整えた。スクールライフノートの時間割機能を活用して予定の見通しを立てたり、欠席児童が学習内容を確認したりするようにした。 	
<p>取組内容⑭【働き方改革の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SKIP 連絡掲示板を効果的に活用したり、企画・立案・実施する際は、起案者が事前に意見を集約し、起案書を作成して、各校務分掌の部長、教頭、校長の決裁を得た後、実施するという形式（決裁制）を導入したりすることで、教職員全員出席の会議回数の削減、会議時間を短縮する。 ・ 教職員全員出席の会議の際は、時程を計画案で知らせる。 ・ 会議等の書類を電子化して配付したり、保護者配付の手紙をミマモルメで配信したりして、ペーパーレス化を進める。 ・ 毎週水曜日にノー残業デー（全教職員 17:30 退勤）、月1回ゆとりの日（放課後に会議を入れない日）を設定する。 	
<p>指標</p> <p>⑳ 第2期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準2（1年間の時間外勤務時間が720時間以下、時間外勤務時間が45時間を超える月数6以下、時間外勤務時間が100時間を超える月数0、直近2～6か月の時間外勤務時間の平均が80時間を超える月0、すべて）を満たす教職員の割合を100%（R7大阪市目標84.9%、R6本校100%）とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 基準2（1年間の時間外勤務時間が720時間以下、時間外勤務時間が45時間を超える月数6以下、時間外勤務時間が100時間を超える月数0、直近2～6か月の時間外勤務時間の平均が80時間を超える月0、すべて）を満たす教職員の割合は4月～11月100%、12月95.83%となり、達成できなかった。 ・ 昨年度までに、教職員全員出席の会議回数や会議時間を25%削減しており、今年度もそれを厳守した。 	B

<ul style="list-style-type: none"> 10月より学校配布の手紙を基本的にミマモルメでの配信に移行した。 職員室の事務机・椅子を撤去し、打ち合わせや作業をしやすい環境に整えることで業務の効率化を図った。(別紙資料参照) 学校行事の多い月は時間外勤務が増える傾向にあり、さらなる行事の精選が必要である。 	
<p>取組内容⑮【教員の資質向上・人材の確保】</p> <ul style="list-style-type: none"> 食物アレルギー研修やエピペン研修、普通救命講習、各教科教育研修、特別支援教育研修、hyper-QU を活用した児童理解研修など、教員の資質向上に関する研修を企画・運営を行う。 若手教員を中心とする若手教員指導力推進委員会を設置する。推進委員会のメンバーが学びたいことを中心としたメンター研修(推進委員会)を月1回以上、企画・実施する。 教員の授業力向上を目指した、各教科領域等の研修を学期に1回以上企画・実施する。 	
<p>指標</p> <p>⑭ 年度末の校内調査において、「研修で得た知識や気づきを、今後活かすことができそうと思いますか」に対して、肯定的に回答する教員の割合を100%(昨年度97%)とする。</p>	
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標⑭については、94%(17人中16人)となり、達成できなかった。 教育DXの推進研修(4月2日)食物アレルギー研修(4月7日)やエピペン研修(4月7日)、普通救命講習(6月13日)、特別支援教育研修(児童理解研修5月12日)、いじめについての研修(7月17日)人権研修(LGBTQ+研修10月10日)カリキュラムマネジメント研修(2月4日)など、教員の資質向上に関する研修を行った。 メンター研修(推進委員会)を月1回以上(計12回)実施した。内容は、4月の学級経営と参観・懇談(4月10日)、初任者・教員として(4月17日)、授業持ち寄り話そう会①②③(5月26日、10月23日、2月17日)、成績のつけ方・観点(6月23日)、1学期を振り返って(7月14日)、生活・総合的な学習の時間の極意(9月16日)、ICTを活用したハイレベルな授業づくり(11月13日)、2学期を振り返って(12月12日)、学校全体を見るとということ(1月20日)1年間を振り返って(3月10日予定)などである。 外国語研修(5月14日・6月4日)、英語モジュール公開授業(10月3日)、国際理解教育公開授業(11月12日)、体育科公開授業(11月28日)、理科公開授業(8月29日、1月29日、2月6日)など教員の授業力向上につながる研修の場を設定した。 校内研究(生活・総合)については、研究授業の日は当該学年以外は下校することで教職員が授業参観に集中して参加することができた。研究に関するアンケートにおいても「児童が主体的・対話的に学ぶことができる手立てを学んだ」「総合の単元構成や授業展開の方法を知ることができた」「児童と単元との出会わせ方について意識して取り組むことができた」などの意見が見られ、授業力向上に 	B

<p>つながっていると考える。</p>	
<p>取組内容⑩【カリキュラム・マネジメントの推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> 年度当初に全学年の全教科・領域の年間指導計画を作成する。それを基に、年間を通して実施し、成果と課題をまとめる。年度末に、カリキュラム・マネジメント部会を行い、各学年で実施した年間指導計画の成果と課題を全教職員で共有し、年間指導計画の改善を行う。 	
<p>指標</p> <p>⑮ 年度末の校内調査において、「指導計画の作成に当たっては、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していますか」に対して、最も肯定的な「よくしている」と回答する教員の割合を35%(大阪市 R7 目標 35%、本校 R6 年度 10.0%)以上とする。</p>	B
<p>結果と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 指標⑮については、70.5%となり達成している。 前期時間割終了前に、年度当初に作成したカリキュラム・マネジメントの修正を全学年で行った。具体的に、関連が強い教科・領域の学習同士は矢印でつなげ、矢印の太さで関連度を表したり、引継ぎ事項(1・2学期)を記入したりした。 スクールアドバイザーによるカリキュラムマネジメント研修会(2月4日)やカリキュラムマネジメント全体会(2月17日)、また、総合的な学習の時間で活用している探究ペタ(指導計画)の見直し(1月19日)を実施し、来年度の研究教科である生活科・総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム作りを進めた。 	
<p>取組内容⑪【「大阪市子ども読書活動推進計画」に基づいた取組】【学校図書館の活性化】</p> <ul style="list-style-type: none"> 貸し出し1回につき、2冊(令和6年度は1冊)までとする。保護者への図書の貸し出しができることをアナウンスすることで、親子での読書を推進する。 季節や各学年の学習内容に応じて、学校図書館の本の展示の仕方を工夫する。 毎週火曜日の8:30~8:45に読書タイを設定する。 週3回、図書委員会を中心に、おすすめの本を紹介するなど、読書活動推進を行う。 本の貸し借りをデータ化し、全児童の貸し借りの進捗状況を把握し、個に応じて支援する。 読書週間を設定したり、大阪市立天王寺図書館と連携して「おはなし会(読み聞かせ)」を全学級で開催したりする。 大阪市立図書館による団体貸出を利用し、調べ学習への支援を行う。 PTA 図書委員の保護者と連携しながら、読書活動推進を行う。 	B
<p>指標</p> <p>⑯ 校内児童アンケート調査(1月調査)の「読書は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を82%(大阪市 R7 目標 76.5%、本校 R6 年度 81.7%)以上とする。</p>	

⑳ 校内児童アンケート調査(1月調査)の「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか(教科書や参考書、漫画や雑誌は除く)」に対して、「読書を全くしない」と回答する児童の割合を13%(大阪市R7目標23.5、本校R6年度13.7%)以下とする。

結果と分析

- ・ 指標㉔に関する1月の結果は、1年93%、2年88%、3年94%、4年91%、5年85%、6年76%だった。全体では87.9%で達成した。
- ・ 指標㉕に関する1月の結果は、1年2%、2年0%、3年6%、4年10%、5年13%、6年20%だった。全体では9%であり、達成した。
- ・ 6月の結果と比較すると2つの指標において6年生以外の学年では結果がよくなったといえる。高学年になるにつれて塾や受験勉強、スマホ利用などが増えて読書の機会が減る傾向にあることが原因として考えられる。低学年のうちから読書をする事への抵抗を少なくするような取り組みを進めていく必要がある。読書週間(11月10日から21日)には「うちどく強化月間」として週1回は宿題のひとつとして最低10分間の家庭読書を行ってきた。その後も引き続いて宿題として家庭読書を取り入れた学年もあったことから指標㉕に関する結果がよくなったといえると分析できる。また、読書へのハードルを下げるために、一人で読む読書の他にも保護者と一緒に読むことやオーディオブックなど、多様な読書の方法があることを紹介した。各学年の実態に合わせてこの家庭読書を続けることで本に触れる機会を増やすことができた。そのほかにも図書室への来館者を増やす取り組みとして来館ポイントカードを作成し、来館を促す活動を行った。
- ・ 図書室の時間割を全学年に割り当てたり、休み時間の図書室開放には全学年の児童が利用したりできるようにした。朝の読書タイム(毎週火曜日)を設定し、その時間には音楽を流すことで集中して読書をする雰囲気を作ることができた。
- ・ 天王寺図書館と連携して学級文庫用の図書を借りて低学年の読書の幅を増やす取り組みを行った。また、読書ボランティアによる「おはなし会」を全学年11月7日に行った。
- ・ 今年度より貸し出し1回につき2冊まで借りることができるようにして学級や家庭での読書推進を行った。
- ・ 月に1回PTAの図書開放を計10回(2月3月については実施予定委)行い、計20名のPTA図書委員の方にご協力いただくことができた。保護者に読み聞かせをしてもらうことで児童も楽しんで本に触れることができ、保護者にも学校図書館の様子を知っていただく機会を得ることができた。今後も継続していく。7月に学校図書の蔵書点検を行うとともに学級文庫の入れ替えを行った。図書の精選を行うことで古いデータの本や状態の悪い本を除くことができ、より図書を選びやすい環境になった。また、学級に状態のよい本を並べることで読書意欲を高められるようにした。

取組内容㉖【教育コミュニティづくりの推進】【地域学校協働活動の推進】

- ・ 学校とPTA役員・実行委員で、昨年度のPTA常置委員会の活動を振り返り、各

<p>委員会の活動内容を見直し、修正する。年度末に、各委員会の成果と課題を共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 運動会、作品展、清掃活動等の学校行事や、芝生除草作業、芝生開放デー、地域花見の会、防災フェスタ、もちつき大会、ボッチャ大会などの地域行事を学校と保護者、地域と連携しながら実施する。その様子を、学校ホームページやはぐくみネット「味原っ子 NOW」や緑化推進（芝生化）事業広報誌などで伝える。 	B
<p>指標</p>	
<p>⑳ 年度末の校内調査において、「地域学校協働本部やコミュニティ・スクールなどの仕組みを生かして、学校の美化、登下校の見守り、学習・部活動支援、放課後支援、学校行事の運営など、保護者や地域の人との協働による活動を行いましたか」に対して、肯定的に回答する教員の割合を 100% (大阪市 R7 目標 85%、本校 R6 年度 100%) とする。</p>	
<p>結果と分析</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 指標⑳については、100%となり、達成している。 ・ 運動会 6 月 8 日、PTA 芝生作業（除草作業 5 月 7 日、芝刈り作業 9 月 17/18/19 日）、PTA 体育厚生委員「普通救命講習」6 月 13 日、PTA 図書委員による「図書館開放」（毎月最終木曜の 15 分休み）、PTA 学級委員「学級懇談会」9 月 19 日、PTA 保健給食・環境委員「給食試食会」10 月 2 日、味原防災フェスタ 11 月 1 日、学習発表会 11 月 15 日、芝生開放デー 11 月 15 日、もちつき大会 12 月 6 日、ボッチャ大会 1 月 24 日、PTA 美化活動 3 月 11 日（予定）を実施した。随時、学校ホームページやはぐくみネット「味原っ子 NOW」、緑化推進（芝生化）事業広報誌「芝生ニュース」でその様子を伝えた。また、今年度の PTA 活動について、PTA 広報委員と教職員で、PTA 広報誌「あじはら」を作成し、3 月に配布予定。 	

資料 1

令和 7 年度 「味原小学校・味原幼稚園・味原保育所」 保幼小接続活動報告

1. 目的【就学前教育カリキュラム等に基づいた教育の推進】

- ・ 味原小学校、味原幼稚園、味原保育所と連携し、幼小接続の取組を推進する。

2. 計画

	時期	(対象) 活動名	ねらい	活動内容	結果・課題
1 学 期	6 月 2 日 (月) 3 限	(幼・保・小) 小学校で、運動 会の演技披露、 競技を楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5 歳児、低学年（1・2年生）の演技を見て、それぞれの発見や工夫に興味をもつ。 ・ 5 歳児と低学年（1・2年生）が互いに興味をもち、一緒に遊ぶことを喜ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低学年（1・2年生）が、運動会で披露する演技を 5 歳児に見せる。 ・ 競技（玉入れ）を 5 歳児と 1 年生が一緒に行う。 	味原幼稚園 5 歳児 16 名、味原保育所 5 歳児 21 名参加
	7 月 1 日 (火) 昼休み	(幼・保・小) スマイルタイム で笹飾りを一緒 に作る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5 歳児と小学生が互いに興味をもち、一緒に活動することを喜ぶ。 ・ 5 歳児、小学生それぞれの活動や発見、工夫に興味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ たてわり班に、5 歳児も加わり、合同で七夕の笹飾りを作る。 3 階の 4 班は味原幼稚園 4 階の 5 班は味原保育所 	味原幼稚園 5 歳児 16 名、味原保育所 5 歳児 21 名参加
	7 月上旬	(幼) 小学校に七夕の 笹を届ける	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学生の作品を見て、発見や工夫に興味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼稚園で飾り付けた笹を届ける。 ・ 小学生がつくった笹飾りを見る。 	7 月 2 日(水)13:15 頃、味原幼稚園 5 歳児が届けに来る
	7 月上旬	(保・幼) プール参観	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5 歳児が小学校の生活を知り、小学生への憧れや期待をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水泳の学習の様子を、保育所、幼稚園の園児が参観する。 	7 月 7 日(月)10:00 頃、味原保育所 5 歳児が 1・2 年生の水泳の様子を見学に来る
	10 月	(保) 避難訓練	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育所の園児が小学校へ避難しに来る。 		

2 学 期	11月上旬	(保・幼) 小学校の学習発表会を鑑賞する。	・小学生の発表の様子を見て、発見や工夫に興味をもつ。	・小学校の学習発表会を鑑賞する。	11月13日インフルエンザ拡大予防のため中止
	11月下旬 5限	(幼・小) 幼稚園の作品展を鑑賞する。	・園児の作品を見て、発見や工夫に興味をもつ。	・1年生が幼稚園の作品展を鑑賞する。	11月21日インフルエンザ拡大予防のため中止
	12月15日 (月) 12月16日 (火) 12月22日 (月)	(幼・小) 5歳児・1年生 「色づくり」	・5歳児と小学生が互いに興味をもち、一緒に活動することを喜ぶ。 ・5歳児、小学生それぞれの活動や発見、工夫に興味をもつ。	・味原幼稚園へ1年生が行き、5歳児と1年生合同班で絵の具を使って色(混色)づくりをする。	実施 12月15日(月)1-1 12月16日(火)1-2 12月22日(月)予備日 後日、各クラスでドキュメンテーションづくり
3 学 期	2月下旬	(幼・小) 学校探検	・5歳児が小学校の生活を知り、小学生への憧れや期待をもつ。 ・1年生が5歳児に対してリーダーシップを発揮する。	・5歳児と1年生で学校探検を行う。	2月24日(火)
	3月	(幼・保) 学校見学	・5歳児が小学校の生活を知り、小学生への憧れや期待をもつ。	・5歳児が授業や給食の様子を見学する。	
通 年	通年	(幼・保) 小学校の芝生、校庭で遊ぶ	・広い芝生の校庭の心地よさを味わったり、小学校への親しみや期待をもったりする。 ・小学校の施設に興味をもつ。	・3・4・5歳児が小学校校庭(芝生)で遊ぶ。 ・3・4・5歳児が小学校の遊具や自然物に興味をもつ。	

教 職 員	通年	(幼・小) 授業や保育、行 事、施設を見学 する	・授業や保育の取り組みについて学び、 互いの教育内容の理解を深める。	・互いの校園内研究会に参加し、 学び合う。味原小学校公開授業 日は幼稚園、保育所ともに5月 に連絡済み(別紙参照)。6月 13日(金)味原幼稚園公開保育 ・行事、施設を見学する。	
	4月14日 15:00~16: 00	(幼・小) 年間計画作成	・1・2年生活科年間指導計画、5歳児年 間保育計画を一緒に考える。	・どんな遊び・学びが考えられる かを検討する。	実施 幼小接続部メンバー、味 原幼稚園3名参加
	7月下旬	(幼・小) ドキュメンテー ション比べ	・共通の対象物「水と土」に5歳児、1年 生がどのような遊び・学びを展開する か共通点・差異点を探る。	・「水と土」を対象に、5歳児と1 年生がそれぞれどのような遊 び・学びを展開したかをドキュ メンテーションにまとめる。成 果物のドキュメンテーションを 比較する。	味原小学校1-1...7月7 日(月)1限、8日(火)1 限、 1-2...7月14日(月)1 限、15日(火)1限に実 施。 幼小接続部会7月16日 (水)15:00~16:00
	7月下旬	(幼・小)「ハ チララタイム (味原 スタートカリキ ュラム)」実践 の振り返り	・「ハチララタイム」の成果と課題を共有 する。	・「ハチララタイム」の成果と課題 を話し合い、加筆・修正を行 う。	幼小接続部会7月16日 (水)15:00~16:00
	9月1日 (月)	(幼・小) 授業づくり	・授業づくりを一緒に考える。	・1年公開授業の指導案検討会を 一緒に行う。	味原幼稚園1名参加
	10月8日 (水)	(幼・小) 授業づくり	・授業づくりを一緒に考える。	・2年公開授業の指導案検討会を 一緒に行う。	味原幼稚園1名参加

11月下旬	(幼・小) 幼稚園の作品展 を鑑賞する。	・園児の作品を見て、発見や工夫に興味をもつ。	・職員が幼稚園の作品展を鑑賞する。	11月21日 味原小学校6名参加
12月中旬	(幼・小) 活動のリフレク ション	・2学期実践の振り返りをとに、幼小での遊び・学びの共通点・差異点を考える。	・「色づくり」の活動を各クラスでドキュメンテーションにまとめる。成果物のドキュメンテーションを比較する。	
12月21日 (日)	(幼・小) 成果発表	・成果報告を全国に発信する。		中谷財団成果報告会(東京工科大学 蒲田キャンパス)で発表
3月上旬	(幼・小) カリキュラムづ くり	・R8年度版スタート・アプローチカリキュラムの作成	・R7年度版をもとに、加筆・修正を行う。	1月19日(月)小学校メンバーでスタートカリキュラム(ハチララタイム)検討。2月19日(木)満田(味幼稚園長)、三宅(味幼主任)、井上(味小校長)、岩本(味小首席)でR8年度「味原架け橋カリキュラム」検討

幼児～児童期における学びが自覚化する教師の働きかけ — ミラー型ライン図を用いた教師と子どもの対話分析をもとに —

企画・司会者 溝邊和成（九州共立大学）

話題提供者 岩本哲也（大阪市立味原小学校） 三宅理恵（大阪市立味原幼稚園）

【研究目的と企画意図】

現在、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（中教審答申2021）」の具体化とともに、幼保小接続の充実に向けた「架け橋プログラム（2022）」の試行実践が稼働している。幼児～児童期の学びの連続性を支援する環境づくりの中で、いかに個別最適で協働的な学びを実現させていくかについては、実践現場に見られる差し迫った課題といえる。特に、この時期に見られる「学びの芽生え」がどのように「自覚化された学び」として成立していくのかについて、直接的な環境要素となる教師の働きかけ等を含めた実践的検討が不可欠である。

そこで、教師（幼稚園・小学校）を対象として、教師の教育的働きかけと子どもの反応（学びの形成）プロセスを事例的に追いかけて、その類型化をゴールとする研究プロジェクトの役割を本研究に定めた。

【関連する先行研究】

目立たせる(marking)、復唱する(revoicing)など Palinosar, S. (2003) のアイデアから、黒田・森本 (2010, 2016) は、小学校理科における談話分析に着目している。それらを基に松村・中城 (2021)、岩本ら (2024) は、教師の働きかけとしてタイプ別細分化を提案してきている。また流田・岩本 (2024) は保育場面で身体操作を含む4観点（声かけ、身振り、立ち位置、物への働きかけ）を併定し、分類を試みている。さらに5歳児・小学校1年生の合同活動における教師の働きかけも報告され（岩本・流田 2024）、本研究の準備となっている。

【調査方法】

データ収集：調査の実施日時・場所、調査対象等は、話題提供1・2内で述べる。

分析方法：教師の働きかけと子どもの反応のデータ分析については、上述の先行研究等を参考に、そのプロセスが時系列を踏まえて視覚的にもわかりやすい図（ミラー型ライン図）を試作し、活用する（図1）。活用手順は、時系列に従って、録画データより行動・文意を損なわな

いようにA・Bの欄に記録する。それらを教師側・子ども側それぞれのa～fに○印で分類・位置付けた後、関係を示す矢印を付す。このような作業を基本原則として図を完成させた後、教師と子どもの双方の行為・発言の連続性、および自覚化（気づきを活かして行動する等）の様相を抽出・確認の上、パターン化の可能性を検討した。

【倫理的配慮】

本研究にかかる2つの調査研究（話題提供1・2）においては、日本保育学会倫理綱領を遵守し、対象となる園及び小学校、保育者、指導者に、研究趣旨、調査結果の活用、個人情報保護等に関して事前説明を行い、了解を得ている。（参考文献略）（溝邊和成）

【話題提供1】幼稚園教諭の働きかけと子どもの変容

（三宅理恵）

<調査日時：2024年11月/場所：A幼稚園の近くにある公園/対象：5歳児>

調査の分析を進めると、幼稚園教諭の働きかけについて、次のような傾向が見えた。子どもの学びが自覚化につながる場合には、教師の働きかけ（表現させる：多答型）→子どもの反応（表現する：返答）→教師の働きかけ（目立たせる：声かけ、復唱する）という、言葉の連続性が表れていた。例えば、子どもが木と木をたたき、音を出しながら遊び、その音を教師に聞かせる場面において、教師が「いい音だったね、どんな音？」（表現させる：多答型）と聞くと、子どもが「タンパリンの音みたい」（表現する：返答）と答える。その返答を聞いて、教師が「タンパリンの音みたい！」（復唱する）と子どもの前で話す。このように、やりとりの最後には、教師が子どもの言葉を復唱したり、「本当だね」などの言葉で目立たせたりすることにより、子どもの学びの了解点となる。子どもは了解点を見つけると、次の活動へと向かっていく。これは、学びの自覚化へとつながっている姿と言える。

また、教師からの働きかけを受けた子どもの反応が、態度や行動で表す時もある。その時には、教師が子どもの実態に応じた働きかけに変化を加え、教師の働きかけ（表現させる：多答型）→子どもの反応（強調：身振り）→教師の働きかけ（目立たせる：声かけ、もどす：確認型）という動きの連続性が見られた。例えば、子どもが自分で見つけたお気に入りの菓子を、教師と共に色分けし、それを教師が持っているタブレットで撮影して遊んでいる場面において、教師が「どうやって置くといいんだろう」（表現させる：多答型）と聞くと、子どもは悩んだ末、2色の中間に無言で菓子を置く（強調：身振り）。教師は「真ん中に置く？両方たよって？」（もどす：確認型）と言葉がけると、子どもは「うん」（表現する：返答）と答える。そこに教師が「なるほど」（目立たせる：声かけ）と言葉かける。

このように、子どもが言葉ではなく、身振りで学びを

教師										子ども									
T	A	B	a	b	c	d	e	f		T	A	B	a	b	c	d	e	f	
			○																
					○														
															○				

矢印：関係の流れ、○：発言の分類箇所 T:時間, A:行動, B:発言
教師側・・・a:目立たせる(声かけ、身振り、立ち位置、物への働きかけ)、b:もどす(確認、連続、再考、切り返し、懐疑)、c:復唱する、d:表現させる(一答、多答、依頼、発見、選択型)、e:付け加える f:まとめる
子ども側・・・a:強調(声、身振り)、b:もどす(確認、連続、再考、切り返し、懐疑)、c:復唱する、d:表現する(返答、依頼、発見、選択)、e:付け加える、f:まとめる

図1 ミラー型ライン図（概略）

示した時には、教師が十分な時間をとったり、代弁し、言葉で返したりしながら、子どもの学びを確認することにより、学びを自覚化できるように導いている。

以上のように、幼稚園教諭の働きかけには、①教師の働きかけ(表現させる:多答型)→子どもの反応(表現する:返答)→教師の働きかけ(目立たせる:声かけ、復唱する)、②教師の働きかけ(表現させる:多答型)→子どもの反応(強調:身振り)→教師の働きかけ(目立たせる:声かけ、もどす:確認型)、という2つのパターンが見られることが分かった。子どもの実態により、それ以外の働きかけの連続性も予想されることから、今後も更なる事例の集積・分析を重ねる予定である。

【話題提供2】 小学校教諭の働きかけと子どもの変容
(岩本哲也)

<調査日時: 2024年11月/場所: B小学校の近くにある公園/対象: 第1学年児童>

小学校教諭Hと子どもの行為・発言をミラー型ライン図にまとめ、その中から教師と子どもの双方の行為・発言の連続性、および自覚化の様相として7事例を抽出した。学びの自覚化につながるきっかけとなる教師の働きかけを「提案型」「受け入れ型」とし、自覚化の様相が見られるまでに働きかけた子どもの人数(個人・集団)で分類した。教師が子どもに「～してみよう」「～するのはどう?」と発言したり、提案したいことを行動で示したりすることきっかけに、子どもの学びの自覚化につながった事例を「提案型」とした。子どもに「どうしたい?」「それいいね」と発言したり、子どもの行動を真似したりすることをきっかけに自覚化が進んだパターンを「受け入れ型」とした。

その結果、4つに整理・分類することができた(表1)。

表1 小学校教諭の働きかけパターン

教師の働きかけ	提案型 受け入れ型	子ども	
		個人	集団
		1・2・3	4
		5・6	7

※数字の数字は事例番号を示す。

「提案型・個人」に該当する事例1は、子どもが持っていたフラフープに教師が「入れるよ」と言って、落ち葉を輪の中に投げ入れるところ(目立たせる:声かけ・物への働きかけ)から始まった。そして、葉を投げ入れることを促すため、教師がフラフープを持つと(目立たせる:物への働きかけ)、子どもは落ち葉を数回投げ入れた(表現する:返答)。1回目は失敗したが、葉を選び直して再び挑戦すると成功し、その場を去った。コントロールしやすい葉を選択できるようになった(自覚化)ことで、学びの了解点に達したと思われる。事例2では、教師が「固い選手権」とつぶやき、「これは柔らかいね」と落ち葉を触る姿を子どもに見せた(目立たせる:声かけ・物への働きかけ)ことをきっかけに、子どもは葉を集め、固さを確かめ始めた。葉をちぎり「きれいに割れた」と言う(表現する:発見)子どもに対して、教師は「きれいな(目立たせる:声かけ)」「パサパサの葉っぱだね(付け加える)」と言葉を添える場面が見られた。その後、子どもは固さの異なる葉を数枚ちぎり、自ら活動を終えた。葉の固さとちぎりやすさを関係付けた

と考えられる。事例3は、教師が袋に落ち葉を投げ入れる姿を見せる(目立たせる:物への働きかけ)ことから始まり、袋からの距離を変え、成功・失敗を繰り返しながら葉の種類や投げ方を変えていく姿(表現する:返答)が見られた。「受け入れ型・個人」の区分には、事例5・6が当てはまる。事例5は、黄色の葉を見せに来た子どもに対して「かわいいね(目立たせる:声かけ)と教師が応えると、子どもは黄色の葉を選んで再び持ってきた(強調:身振り)。教師と子どもで黄色の葉の大きさを確かめ合うことで、子どもは黄色の落ち葉の大きさに一定の認識が得られたと考えられる。事例6は、子どもが葉にあいた穴から教師の方を見てきたので、教師も穴があいた葉を見つけ、子どもの真似をした(目立たせる:身振り)。さらに、穴のあいた葉を互いにのぞき合うことで、子どもは、葉にあいた穴の大きさが違うことや、穴のあいた葉はいろいろな種類があることを理解した。

このように、個人に働きかける場合、教師は「提案型」「受け入れ型」いずれも「目立たせる」働きかけを契機に学びの自覚化を促していく傾向があると推察される。

一方、「提案型・集団」の事例4では、4人の子どもに「落ち葉をどこまで舞い上げることができるか」声かけをする(表現させる:一答)ことから、子どもが繰り返し試し始める(表現する:返答)。随時、教師は「どこまでいった?」「もどす:確認」、「すごいね(目立たせる:声かけ)などの働きかけを行った。葉の重や投げ方を工夫し、友達の手が届かないほど高く上がったところで、満足そうな表情をして活動を終えた。「受け入れ型・集団」の事例7でも、2人の子どもに「集めた葉っぱで何する?」(表現させる:多答)と働きかけたことをきっかけに、落ち葉を舞い上げる活動が始まった。その後、いくつかの教師の働きかけ(もどす:確認、表現させる:選択)や子どもの反応(表現する:返答、強調する:身振り)があった。落ち葉を2回舞い上げ、活動を終えた時点で、落ち葉が舞い落ちる様子の理解がなされたと考えられる。

いずれも集団への「表現させる」働きかけからスタートし、「もどす」「目立たせる」「表現させる」などの働きかけを行いながら、学びの自覚化を促すといった点が見られた。

【全体考察・今後の展望】

1 教師と子どもの発話・行動の連続性・・・話題提供1では、教師の「表現させる」の出発点から、「目立たせる、もどす」の終着点までが一連の学びの芽生えから自覚に結びつくプロセスであることが見つかると。話題提供2においても「提案型」「受け入れ型」の2パターンが見出され、「目立たせる」から「もどす」や「表現させる」の連続した働きかけがポイントとして見えてきたと言える。

2 学びの変容(自覚化)・・・「了解点」という表現から、子どもの活動・思考の停止状態を教師の働きかけの中から引き寄せたところに、学びの自覚化への教師・子ども的一致点を見出していると解釈される。

3 今後の展望・・・今回は、わずかな事例による結果報告に過ぎない。連続性の精査をベースとして、事例収集と分析法の精緻化を図っていくことに研究の向上を期待する。

資料 5

表の見方 : 活動内容 <コメント欄に「わらい」目標(「単元名」教科・領域)>

味原幼稚園アプローチカリキュラム(第V期)デザイン						味原小学校スタートカリキュラム(1学期)学習デザイン																			
5 年 級 学 年	1月		2月		3月		第1学年																		
	1+2週	3+4週	1+2週	3+4週	1+2週	3+4週	4月		5月		6月		7月		8+9+10週	11週									
言語	お話を登場人物になりきって、話し言葉を考え、演じる いろいろな言葉や言葉があることを知り、使ってみようとする 風流の感じに興味をもち、戸外の世界で遊んだり、歌をつつてみようとする 面白い言い方を工夫したり、友達の話を面白く行ったりする						言語・ 数 算	<p>「はじめのいっばい」 学校での生活にわくわくしながら、友達と一緒に話したり、歌ったり、描いたり、体を動かしたりして、学ぶ楽しさを感じる。</p> <p>「シャキッとタイム」(1セット15分) 言葉を集めたり読んだり遊んだりしながら、数の順番やたし算・ひき算、長さの比べ方を学び、分かったことを友達に伝える。</p> <p>「きれいにさいね わたしの はな」 植物の種まきや世話、成長の観察を行い、絵日記や造形を通して気付いたことや感じたことを表すとともに、身の回りの整理や命の大切さについて考える。</p> <p>「きせつと なかよし はる なつ」 身近な季節の様子や生きものに目を向け見付けたことを言葉や文で表し、音やリズムに楽しむ活動を通して、友達と助け合いながら自然や生活への関心を深めていく。</p> <p>「わくわく ときどき しょうごうこう」 学校生活に関わる体験や表現活動を通して、まじりや人の関わりを学び、安心して学校生活を過ごす基礎を身に付ける。</p> <p>「あ〜〜〜ひらめき工房」 身近な材料を用いて、形や線を工夫しながら、思い付いたことを表現する。</p> <p>「あじはら芸術学校」〜術の遊戯〜 多様な運動遊びや音楽活動を通して、体を動かす楽しさや表現する喜びを味わう。</p>										言語・ 数 算	自然 生活	学校 行事	学校 生活	道 徳	身体 教育	音楽	体育
環境	友達と一緒に思いを伝え合いながら遊びを深めたり、共同作業をつくらせたりする 友達と一緒にルールや役割を認識したり、つづかえたりしながら遊ぶ						環境											自然 生活							
人間関係	自分たちのイメージに合うものや表現するために必要なものなどを、絵本や写真、製作物などを用いて表現する 体育着や移したに向けた活動、小学校生活を楽しく通して、通学することを楽しみにする 交友関係、行事準備など、生活の様々な部分で自分たちで決める 自分なりに感じた喜びや楽しさを味わって、自分の成長を表現する						人間関係											学校 生活							
芸術							音楽											音楽							
運動							体育											体育							

一部拡大

<p>「はじめのいっばい」 学校での生活にわくわくしながら、友達と一緒に話したり、歌ったり、描いたり、体を動かしたりして、学ぶ楽しさを感じる。</p> <p>「シャキッとタイム」(1セット15分) 言葉を集めたり読んだり遊んだりしながら、数の順番や</p>	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きなことや興味をもっていることを見付け、言葉や表情で伝えようとする。友達の話や聞き、互いの思いに関心をもつ(「はじめのいっばい」生活) 学校生活について考え、楽しみや期待をもつ。みんなで楽しく学校をつくらうとする気持ちや育む(「1.たのしいがっこう」道徳) 言葉の響きやリズムの面白さに気付き、声に出すことを楽しむ。進んで声を出し、言葉に親しもうとする(「きこえるよ」国語) 自分のことを相手に分かるように話す。話したり聞いたりする活動を通して、人と関わる楽しさを味わう(「よろしくね」国語) ひらがなの形や書き順に関心をもち、丁寧に書こうとする。文字を書くことに親しみ、伝える手段としての文字に気付く(「もじをかこう」国語) 正しい姿勢や鉛筆の持ち方を知り、意識して書こうとする。書く準備の大切さに気付く(「たのしくかこう」国語) 音読するときの姿勢や口の動かし方に気付き、まねして読もうとする。声に出して読む楽しさを味わう(「あいうえおのうた」国語) 身の回りの量を比べる活動を通して、数や量に親しむ。比べた結果を言葉や身振りや表す(「くらべたことがあるかな/おおいのほどちらかな」算数) 10までの数を具体物と対応させて捉える。数のまとまりや順序に気付き、数の見方を広げる(「1.ななかまづくりとかず」算数) 身の回りの色や形に目を向け、感じたことを言葉で表す。色や形の色や面白さに気付く(「すきなかたちやいるなあこ」図工) 描きたいものを思いのままに表現する楽しさを味わう。自分なりの表し方を大切にしようとする(「どんどんかくのほたのしいな」図工) 歌ったり体を動かしたりして、音楽を楽しむ。友達と一緒に音楽活動をする楽しさを感じる(「1.うたって うごいて みんなでおんがく」音楽) 体を動かす心地よさや楽しさを味わう。友達と関わりながら、簡単なルールを守って運動遊びをする(「おまじの運動遊び」体育)
--	--

問題解決の力に焦点を当てた小学校理科における評価基準構築の試み

児童の記述分析を手がかりとして

○岩本 哲也¹、溝邊 和成²、大久保 舞³、三宅 理恵⁴、流田 絵美⁵、城田 絃子⁶

Tetsuya IWAMOTO, Kazushige MIZOBE, Hiroko SAKATA, Kouki HIRAKAWA, Rie MIYAKE, Emi NAGAREDA

¹大阪市立味原小学校、²九州共立大学、³大阪市立東中川小学校、⁴大阪市立味原幼稚園、⁵学校法人大宮学園大宮幼稚園、⁶(株)ボーネルンド

【キーワード】指導と評価の一体化、評価規準、評価基準、問題解決の力、思考・判断・表現

1. 研究の背景と目的

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所，2020）では、「評価規準の作成に当たっては、各学校の実態に応じて目標に準拠した評価を行う」と示されている。「指導と評価の一体化」を目指した研究も進められており（渡辺ら 2021，小林ら 2025）、実践的な知見の蓄積も見られる。しかしながら、理科に対して苦手意識が高い教員や教職経験が少ない教員が多い学校で、各学年、各学級の実態に応じて評価規準を作成することは難しい。さらに、評価規準を基に評価基準を作成したり、基準達成に向けた個に応じた指導を考へたりすることは、非常に難易度が高い。

そこで、本研究は、問題解決の力（差異点や共通点を基に問題を見いだす力、既習の内容や生活経験を基に根拠のある予想や仮説を発想する力、予想や仮説を基に解決の方法を発想する力、より妥当な考えをつくりだす力）に焦点を当て、問題解決場面（4場面）での記述内容に注目し、その特徴的表現を分析する。これにより、評価基準の具体化や、個に応じた指導の在り方に寄与することを目的とする。

2. 調査方法

(1) 対象と実施時期

大阪市立 A 小学校 3 年生 56 名、4 年生 48 名、

5 年生 58 名、6 年生 49 名を対象に、2025 年 4～6 月に行われた。

(2) 対象場面のデータ収集と分析方法

第 3 学年「風とゴムの力の働き」「身の回りの生物」、第 4 学年「季節と生物」「天気の様子」「雨水の行方と地面の様子」「電流の働き」、第 5 学年「植物の発芽、成長」「天気の変化」、第 6 学年「燃焼の仕組み」「植物の養分と水の通り道」「人の体のつくりと働き」の内容で、問題解決の力を育成する場面での児童の記述（文、図や絵）を収集した（表 1）。得られた記述を分類する。なお、分類・整理等に当たっては、6 名中 5 名以上の一致率を担保した。

表 1 児童の記述収集件数 n=1815

問題解決の力	3 年	4 年	5 年	6 年	計
問題の見だし	112	48	—	98	258
予想や仮説の発想	—	96	116	49	261
解決の方法を発想	56	48	116	245	465
より妥当な考え	56	240	290	245	831

表内数値は、件数を示す。

3. 結果と考察

得られた記述を基に、特徴的な表現事例を表 2 に整理した。表 2 により、各表現に対する指導の在り方をより詳述できると考える。今後、更なる事例収集と分析の精緻化を図る。また、表現事例を基に、児童が自ら評価基準を設定するといった授業実践を行う予定である。

引用・参考文献：略

表 2 問題解決の力に関する児童の表現事例

問題解決の力	レベル0	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
問題の見だし	・記述なし	・法定的自然現象についての表現がない	・題目はよいが、十分な文	・問題になっている ・なぜ、どうして+事象	・変化を探る問題となっている（→が関係しているだろうか） ・問題を問う問題になっている（→にはどのような関係があるだろうか） ・予想を含んだ問題になっている（→すれば、～なるのだろうか）
予想や仮説の発想	・記述なし	・問題と対応していない	・予想だけ	・予想と事象のつながりが不十分	・予想・根拠（既習内容）が不明瞭
解決の方法を発想	・記述なし	・問題と対応していない ・予想を導く方法ではない	・「予想を導く方法ではあるが、根拠（文）ではない」（条件あり）のみ（計画） ・使用する道具のみ ・測定する対象の足らない	・予想を基に、変える条件を考へ「あり/なし」の2つの方法がある ・実験前後で測定している	・変える条件だけでなく、変えない条件を具体的に記載考へている （「変える条件以外は同じにする」という言葉ではなく） ・結果の記述も含んでいる
より妥当な考え	・記述なし	・事象のみ ・問題と対応している事象のみ ・事象+問題と対応していない事象	・事象と事象のつながりが不十分 ・1頁の計算で解決 ・事象から十分な説明（知識活用）	・事象+根拠（文章性が高い）	・他者の結果（客観性）を考慮している（○表中心例） ・複数の結果（客観性）を考慮している（○表中心例、○表中心例） ・見方を替えている ・異なる複数の方法を関係付けている ・字んごを身の回りの自然現象に当てはめている

資料 7

「がんばる先生支援」研究支援 研究発表会・公開授業のご案内

令和 7 年 7 月 7 日
選定番号 230
大阪市立味原小学校
校(園)長 井上 克己

研究テーマ **理科の学びをつなぐ「評価基準と指導の手立て」の開発**
～「思考・判断・表現」の観点から見る第3～6学年の実態分析と系統的・発展的な指導～

1 日 時 令和 7 年 8 月 29 日 (金) 13 時 55 分～16 時 30 分 (受付 13 時 30 分から)

2 会 場 大阪市立味原小学校

〒543-0023 大阪市天王寺区味原町 8-19 電話 06-6768-2288
・大阪メトロ千日前線「鶴橋駅」下車 1 番出口 徒歩 3 分
・JR「鶴橋駅」、近鉄「鶴橋駅」下車 徒歩 5 分

3 時 程

13:30	13:55	14:40	14:50	16:30
受付	公開授業 6年「植物のつくりとはたらき」 授業者：岩本哲也	移動休憩	全体会	
			研究発表	研究討議 指導講評

4 募集定員 無し

5 参加申込

申込期間 令和 7 年 7 月 7 日 (月)～8 月 26 日 (火)
申込方法 右の 2 次元コードより申込みをお願いします
※必ず、事前に申し込みをしてください。
※ご質問等ございましたら、大阪市立味原小学校
06-6768-2288 担当 岩本まで、ご連絡ください。

2025年8月29日(金) 大阪市立味原
小学校公開授業参加申し込み



6 指導講評・講師

神戸市立雲中小学校 主幹教諭 下吉 美香 先生

(2019～2020 年には、評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究委員(国立教育政策研究所)を経験。共著に、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校理科』(国立教育政策研究所)等がある。現在、日本理科教育学会「理科の教育」編集委員として活躍。)



7 その他

山中謙司(北海道教育大学旭川校准教授、元 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 学力調査官・教育課程調査官)、川上真哉(帝京大学准教授、前 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 学力調査官・教育課程調査官)、田村正弘(武蔵野大学特任教授、元 全国小学校理科研究協議会会長)、野原博人(立命館大学教授)、寺本貴啓(國學院大学教授)、久坂哲也(岩手大学准教授)、三井寿哉(帝京平成大学准教授)、鈴木康史(横浜市長三保小学校長)、鳥居圭(江戸川区立二之江第二小学校)などの理科に精通された先生方が全国から参加します。全国の先生方とつながりを深めていただければと思います、全体会終了後、懇親会も予定しておりますので、ぜひご参加ください。



資料 8

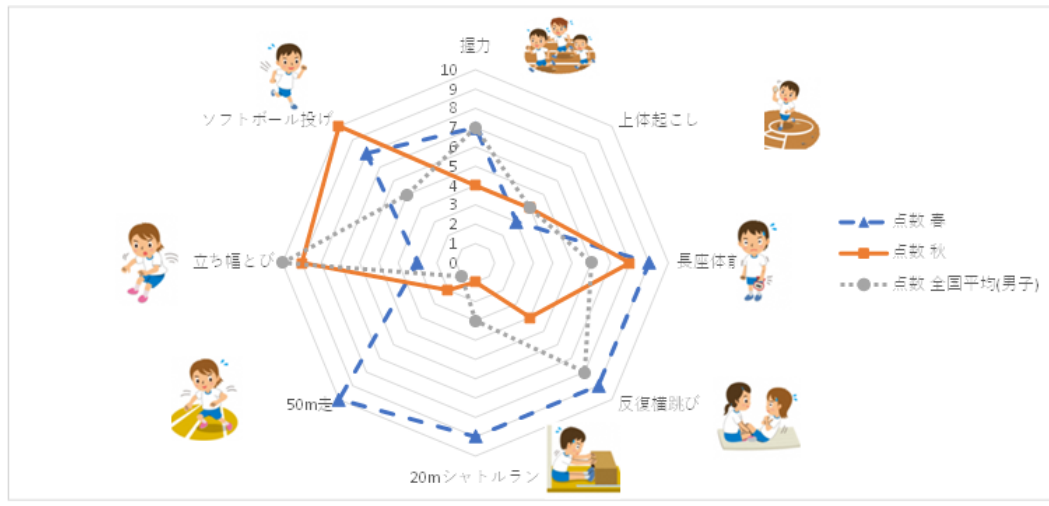
R7年度 スポーツテスト

年	組	番
---	---	---

名前	a
----	---

種目	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横跳び	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ソフトボール投げ
点数	春	7	3	9	9	10	3	8
	秋	4	4	8	4	2	9	10
	全国平均(男子)	7	4	6	8	3	1	10

種目	握力(kg)	上体起こし(回)	長座体前屈(cm)	反復横跳び(回)	20mシャトルラン(回)	50m走(秒)	立ち幅とび(cm)	ソフトボール投げ(m)
記録	春	3	7	4	2	8	9	3
	秋	8	6	10	7	8	8	5
	全国平均(男子)	1	1	1	1	1	1	1



秋の記録の目標と、目標達成に向けての作戦を立てよう！

例：50m 走で、9 秒台をめざす。そのために、うでを大きく速くふる練習を毎日する。

秋のスポーツテストを終えて、ふりかえろう

例：50m走の練習を毎日したから、タイムがよくなったと思う。目標が達成できて本当にうれしい。自分が考えた作戦がよかったと思う。来年は 9.5 秒をめざしたい。

秋のスポーツテストに向けて、自己調整しながら取り組むことができるようにした。

資料 9

スポーツテスト全国平均点数との比較

種目	全国平均 ポイント	握力		上体起こし		長座体前屈		反復横とび		20mシャトルラン		50m走		立ち幅とび		ソフトボール投げ									
		↓	↑	↓	↑	↓	↑	↓	↑	↓	↑	↓	↑	↓	↑	↓	↑								
1年	全国平均(男子)	4	12	0	4	6	2	4	7	8	4	3	7	4	20	0	4	12	0	3	4	3			
	全国平均(女子)	3	3	0	4	2	3	4	6	6	4	3	5	4	2	0	3	21	0	3	11	7	3	2	8
2年	全国平均(男子)	4	2	3	5	5	10	5	3	6	5	1	11	5	8	1	4	7	2	4	1	3			
	全国平均(女子)	4	0	0	5	1	5	5	1	1	5	0	4	5	3	1	5	6	0	4	2	0	4	1	0
3年	全国平均(男子)	5	0	3	6	2	8	5	1	8	6	11	1	6	3	3	5	8	2	5	2	3			
	全国平均(女子)	5	0	6	6	7	11	5	0	9	6	6	1	6	10	1	5	4	1	5	6	0	5	2	3
4年	全国平均(男子)	6	3	2	6	5	13	6	8	1	7	2	2	6	3	8	6	13	0	6	12	3	6	12	1
	全国平均(女子)	6	0	0	7	2	3	6	7	3	7	2	3	6	1	1	6	8	0	6	7	0	6	2	1
5年	全国平均(男子)	6	1	1	7	5	6	6	7	5	8	10	1	7	13	2	7	21	1	6	12	3	6	9	3
	全国平均(女子)	7	7	0	8	6	5	7	10	4	8	7	3	7	11	2	7	15	1	7	12	1	6	1	3
6年	全国平均(男子)	7	7	8	8	13	8	7	14	8	8	5	11	8	13	6	8	20	2	7	11	13	7	9	6
	全国平均(女子)	8	4	0	8	10	3	7	12	0	8	0	5	8	5	1	7	6	0	7	3	4	7	6	1
		39	23		64	77		76	59		50	54		68	43		144	10		103	36		51	36	

平均-2以下人数

平均+2以上人数

資料 10

4月に比べて10月の体カテストの記録の方が良い児童の割合

(%)

		握力	上体起こし	長座体前屈	反復横跳び	20m シャトルラン	50m 走	立ち幅跳び	ソフトボール 投げ
1年	男子	91	56	47	59	31	78	69	56
	女子	86	57	62	76	24	62	76	52
2年	男子	78	52	60	19	7	81	41	56
	女子	79	35	71	36	21	93	29	39
3年	男子	39	35	61	52	48	48	48	39
	女子	42	21	70	45	48	36	36	24
4年	男子	52	72	45	62	31	86	72	48
	女子	69	56	44	43	38	88	38	63
5年	男子	50	37	53	56	34	66	50	45
	女子	44	22	22	44	44	52	60	52
6年	男子	73	61	52	58	39	79	73	55
	女子	67	48	71	48	14	67	48	33
平均		64	46	55	50	32	70	53	47

資料 11

4 月体力テスト各学年平均数値

		握力	上体起こし	長座体前屈	反復横跳び	20m シャトルラン	50m 走	立ち幅跳び	ソフトボール 投げ
1 年	男子	8.2	15.8	25.3	30.4	34.0	11.0	108.9	7.9
	女子	6.2	9.7	26.8	26.5	17.1	13.5	89.5	5.3
2 年	男子	10.3	17.0	28.4	34.5	37.2	10.6	113.6	11.2
	女子	8.7	14.4	28.9	32.4	31.9	11.4	101.8	6.9
3 年	男子	13.6	15.7	30.2	30.7	30.5	10.6	117.6	15.3
	女子	12.6	15.5	35.8	29.5	30.6	10.7	123.8	9.9
4 年	男子	13.9	17.1	29.3	37.3	38.5	10.7	131.4	16.8
	女子	12.9	17.2	31.0	34.9	37.2	10.7	114.6	10.7
5 年	男子	16.1	18.7	32.9	45.4	41.8	10.2	126.5	18.2
	女子	14.0	18.7	32.5	37.2	41.3	10.3	124.8	11.3
6 年	男子	17.3	18.4	34.2	45.3	48.8	9.9	162.6	22.1
	女子	17.2	18.3	32.3	42.0	50.0	9.8	138.0	12.7

令和7年度 食に関する指導計画(案)

未来を切り拓く学力・体力の向上 部
健やかな体の育成 課
健康教育・食育の推進 係
【担当:志水】

目的

学校給食を通して、児童が生涯を健康に過ごすために必要な食に関する知識や意識の基礎・基本を知らせ、自ら健康管理できる力を育てる。

実施方法

栄養教諭が、学級を訪問し指導を行う。

・授業時間(学級活動)全学級、年間2回程度行う。

(日時については各担任と調整)

・給食訪問(給食時間)は随時

・「きゅうしょくだより」(児童向け)・・・毎月初め・夏休み前・冬休み前・給食週間の計14回発行。

・「食育だより」(保護者向け)・・・6月、9月、11月、2月の計4回、食育の日に合わせて、19日付発行予定。

指導内容

学年	主 題	実施月予定
1年	たべもののなまえをおぼえよう	7月
	すききらいをしないでたべよう	1月
2年	ほねやはをじょうぶにしよう	5月
	しゅんの食べものについて知ろう	10月
3年	野菜を食べよう	6月
	よくかんで食べよう	11月
4年	飲み物について考えよう	6月
	おやつについて考えよう	10月
5年	魚について知ろう	4月
	和食について知ろう	11月
6年	食品表示を見て命を守ろう～食物アレルギー～	5月
	バランスのとれた食事を考えよう	12月

職場で固定席を廃止し、共通の机・椅子を使う利点

①コミュニケーション・協働の活性化

- ・ 部署やチームの垣根を越えて席が近くなることで、普段交流が少ない人同士が話すきっかけが増える。
- ・ 打合せや相談がしやすくなり、情報共有やアイデア創出が促進される。

②スペース効率の向上

- ・ 常に全員が出勤するとは限らない現代では、固定席を全員分確保すると無駄が生じやすい。
- ・ 共通テーブルを導入すれば、オフィスや面積を有効活用でき、空いたスペースを別の用途に転用できる。

③柔軟な働き方への対応

- ・ 在宅勤務やリモートワークと組み合わせやすくなる
- ・ 出勤人数に応じて席を調整できるため、フレキシブルな勤務形態を支援できる。

④清潔で整理された環境の維持

- ・ 固定席があると私物や資料が積み上がりやすいが、共通席だと「毎日片づける」習慣が生まれ、整理整頓された職場環境が保たれる。
- ・ クリーンデスクポリシー（机上进行を常に清潔に保つルール）とも相性がよい。

⑤組織文化の変化・意識改革

- ・ 「自分の席」という感覚をなくすことで、職場全体がオープンで平等な雰囲気になりやすい。
- ・ 部署をまたいだ一体感を生み出し、組織文化の刷新につながる。